

児童文学東北の魅力発信

みちのく童話会

東北6県の祭りや名産品などをテーマにした児童文学で東北の魅力を発信しようと、6県在住の作家が作る「みちのく童話会」が、児童文学シリーズ「東北6つの物語」(国土社の刊行)に取り組んでいる。本県の物語を執筆した作家の吉田桃子さん(42)＝郡山市、堀米恵さん(66)＝福島市出身、宮城県在住の2人に、刊行の目的や作品に込めた思いを聞いた。



みちのく童話会が刊行する「東北6つの物語」シリーズ(各巻500円)

食や祭り「6つの物語」



「物語には忘れられてしまふことを伝えていく役割がある」と話す吉田さん



福島市に引っ越してきた少年がわらじまつりに参加する話などを書いた堀米さん

「郷土見直すきっかけに」

みちのく童話会は、東北集作家達が各県の魅力を独自の児童文学の会をつくらうと作家たちが集まり、2021年に活動を開始した。会員は現在13人で、23年に児童文学新人賞「みちのく童話賞」を開催したほか、「東北6つの物語」の刊行や作家志望者向けの童話塾を開くなどの活動を行っている。吉田さんは「地方」に作家の集いしき」の計画テーマで出さはあるが、児童向けの短編集、今月刊行予定の第6巻

「偉人」で完結する。吉田さんと堀米さんはシリーズを通して3作品ずつ執筆した。吉田さんの作品のうち「東北おもしろい物語」に収録された「手のひらサイズのしあわせ」は、東京に住む少女が震災翌年の県内を訪れ、猪苗代町の米農家の家族と交流する物語だ。吉田さんにとって「印象深い作品」といい「物語には、時間がたつと忘れられてしまふことを伝えていく役割もある。当時の感覚や体験を、今の子どもたちにも知ってほしいと思って書いた」と話す。

このほか、吉田さんの作品は「スイーツ」に福島市の桃パフェを、「こわい」には安達ヶ原の鬼婆伝説に基づき作品が収められた。堀米さんは、「東北まつり物語」に福島市に転入し初めてわらじまつりに参加する少年を描いた作品「わらじまつり」が収録された。約50年前に始まった新しい祭りであることに少年が驚く場面、大人が「どんなにむかしから続くお祭りだ」と必ずつ、始めた人がいる」と伝える言葉には、堀米さんの「歴史の長さだけが祭りの価値ではない」とのメッセージが込められている。

堀米さんの作品は「ふしぎ」に五色沼を巡る親子の物語、「偉人」には、野口英世とその周囲の人々を巡る物語が収録されている。東北の児童作家が力を合わせたシリーズの完成に、吉田さんは「東北の読者が、郷土の魅力を見直すきっかけになってほしい。ほかの地域の読者も、東北に行ってみたいと思ってもえたらうれしい」、堀米さんは「東北は文化と自然、そして人が豊か場所。今回のシリーズも含め、童話会の活動で東北の魅力が再確認されることを願う」と思いを語った。

みちのく童話会は今後も毎月の定例会を継続し、新しい取り組みに向けて活動を続けていく。

▲ 2月11日 福島民友新聞掲載

「東北6つの物語」刊行の目的は？

東北の魅力や特徴を伝える6テーマの内容は？また、あなたの興味があるテーマはどれですか？

吉田さんや堀米さんの取り組みや作品に込めた思いについて、あなたの感じたことをまとめてみましょう！